

聖杯騎士セイバー

JALBAS

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『F a t e ／ s t a y n i g h t』と『宇宙刑事シリーズ』のクロスです。

F a t e のキャラ達が、宇宙刑事の世界観の中で戦う話です。

宇宙刑事シリーズのキャラは一切出てきません。

目

次

『黒化（こくか）せよ！セイバー！』

1

』

〝黒化（こくか）せよ！セイバー︕︕』

聖杯……

どんな願いでも叶えてくれる万能の願望機。

本来それは、生命体では無いため意思等は持たぬ物であつた。しかし、無限の宇宙で果てしなく続く『聖杯戦争』によつて聖杯は汚染され、邪悪な意思を持つ強大な『悪』と化してしまう。

そうして自分の星を滅ぼしてしまつた暗黒聖杯『アンリマユ』は、その魔の手を宇宙全体に広げていつた。

その無限に近い魔力を使い、暗黒帝国『セイドウ』を組織し、次々と星々を滅ぼしていくつた。

だが、その強大な悪に対抗する者達も現れた。

逆に聖なる意思により擬人化した聖杯『アイリスフィール』を中心に、セイドウから星々を救うための組織、『マドウ』が結成された。

太陽系第三惑星地球。

今、この星にセイドウの魔の手が迫る。

それを阻止すべく、マドウの誇る“聖杯騎士”が地球に降り立つ。
その騎士の名は……

地球に、一隻の宇宙船がやつて来た。

セイドウの侵略から地球を守るため、マドウから派遣された超次元戦闘母艦“ヘラクレス”であった。

ヘラクレスの心臓部には、聖なる大聖杯“アイリスフィール”的端末である、小聖杯の“イリヤスフィール”が内蔵されている。

そして、マドウのエージェントである三名の戦士、セイバー、シロウ、リンが乗り込んではいた。

「あれが地球なの？ イリヤ？」

ブリッジから目の前にある蒼い星を見て、赤いパイロットスーツを着たリンが問い合わせる。

『そうよ、リン。』

母艦の頭脳体でもある、イリヤスフィールが答える。

「俺達の、故郷に良く似ている……」

緑のパイロットスーツを着た、シロウが言う。

「シロウ……リン……あなた達の故郷の星は……」

言いかけて、青いパイロットスーツを着たセイバーは口籠る。

シロウとリンの故郷は、セイドウによつて十年前に滅ぼされてしまつていた。

その時に死にかけた二人は、マドウの総司令官であるキリツグ長官に助けられ、マドウの一員となつたのだ。

『この星を、シロウ達の星の二の舞にしちゃいけない。私達の力で、必ず守るのよ！』

「はいっ！」

「ああ！」

「当然よっ！」

イリヤスフィールの言葉に、セイバー、シロウ、リンは決意を固めるのだつた。

異次元空間内に浮遊する、セイドウの本拠地 „コトミネ城“。

その中心部の礼拝堂に、セイドウの幹部と兵士達が終結している。

彼らの前面の壁には、地球の全景が投影されていた。

「ふふ……我らの故郷に似た、生命に満ち溢れた豊かな星のようだ。」

地球を見詰め、冷静に分析をするセイドウの大幹部、神官キレイ。

「一気に攻め滅ぼすのですか？」

その横に立つ。紫のローブに身を包んだ、魔女メディアが問う。

「それでは面白みが無い。この星の生きとし生ける者的心を闇に染め、呪いに満ちた星と化してから滅するのだ。」

それを聞き、メディアは自分達の背後の祭壇に祀られている、歪な杯を模した巨像に歩み寄つて行く。

「暗黒聖杯アンリマユ様、新たな英靈獸に命をお吹き込み下さい。」

そう言つて、メディアは魔力を高める。メディアと巨像の間に、巨大な魔力の塊が出来上がりつて行く。

『■■■■■！』

およそ人のものとは思われない叫びと共に、巨像から無数の闇が触手のように放たれ、魔力の塊を包み込む。それは一瞬収縮したかと思うと、一気に膨張して爆ぜる。

「グゥアアアアアアアアアアアッ！」

闇が弾けた跡には、漆黒の鎧に体を包まれ、全身から闇のオーラを溢れ出させた騎士の姿があつた。

「英靈獸、ランスロット降臨です。」

「うむ……クズキ將軍！ 英靈獸ランスロットを率いて、あの星の者共を深い呪いの闇に

落とし込むのだ！」

「ははっ！」

キレイの指令を受け、クズキ将軍とその配下が、地球侵略を開始した。

日本の冬木市にある穂群原学園。

セイドウは、まずこの学園に目を付けた。

穂群原学園内の弓道場。

夕暮れに、一組の男女が口論をしていた。

「どういう事だ？ 美綴？」

「どうもこうも無い。間桐……もう皆、お前には付いて行けないという事さ。」

「僕抜きで、大会を勝ち抜けると思つていいのか？」

「部活動は、勝利が全てじゃ無い……お前の除名は、部員皆の総意だ。」

そう言つて、美綴綾子は弓道場を後にする。

一人残された間桐慎一は、その場に跪き、更に両手を床について震えていた。

「く……くそつ！ 馬鹿にしやがつて！ ……このままで済むと思うなよ！」

「……ならば……思い知らせてやるがいい……」

突然の声に、驚いて顔を上げ、振り向く慎一。

声の先には、スースツ姿の一人の男性が立っていた。

「新任の……葛木？」

セイドウの暗躍を嗅ぎつけたシロウ達も、穂群原学園に潜入していた。
シロウとリンは、『衛宮士郎』、『遠坂凜』と名乗つて、転入生として学園内に潜り込んだ。

セイバーは、学園の外に待機して、動向を伺っていた。

翌日の昼休み、シロウとリンは屋上でお互いの調査状況を確認し合う。

「既に、学園全体が結界に包まれているわ。いつ発動されてもおかしくない状況よ。そして発動されれば、ものの数十分で皆生氣を魔力として吸い取られて、死んでしまうわ。」

「何故、そんな結界を張ったんだ？ そんな事をしなくとも、暗黒聖杯には無限に近い魔力があるだろう？」

「おそらく、魔力を吸い取る事が目的じや無いわ。この学園の生徒を唆して、そいつに結界を発動させる気よ。地球人同士で憎み合い、殺し合わせようとしている……」「何て奴らだ！」

「その仕掛け人として、セイドウの手先が学園内に忍び込んでいる筈よ。怪しい人物は、リ

「ああ。新任教師の葛木宗一郎、こいつが怪しい。」

その時、突然校舎が大きく揺れ出し、校舎内、校庭、至る所から赤い帯のようなオーラが発せられ、学校全体をドームの様に包み込んでしまう。

「こ……これは？」

「結界が発動してる?」

「階の化学室。

間桐慎二が、葛木から渡された結界発生装置を握り締め、狂気の叫びを上げている。
「へ……へへへ……死んじやえよ……みんな……僕を馬鹿にした奴らなんか、皆死んじまえつ！」

「い……いけない！直ぐに止めさせるんだ！」

シロウとリンは、急いで校舎内に入る。中は、一面血のような赤だつた。空気までも赤く染まり、息をするだけで普通の人間は昏睡してしまってだろう。

魔術師ならば、体内で魔力を生成できるからそう影響は受けない。マドウの戦士であり魔術師でもある二人は、直ぐさま魔術回路のスイッチを入れた。
まず四階の、階段に一番近い教室に飛び込む。

「……」

一瞬、二人は足を止めて、その惨状に踏み入るのを躊躇した。

そこは、地獄のような光景だった。どの生徒も、衰弱し、苦しみ、倒れている。

シロウは、倒れている生徒に寄つて行き、顔に耳を近づける。

「息はある。まだ、間に合わない訳じゃ無い。とにかく、急いで結界を解かないと！」
「結界の基点は……一階よ！」

「よし！ 急ぐぞっ！」

廊下に飛び出し、階段に向かう二人。

そこに、セイドウの骨ゴーレム達が襲い掛かる。床や壁の中から、無数にゴーレムが湧き出してきた。

「くそっ！ やっぱり出やがったか！」

シロウとリンは穂群原学園の制服を脱ぎ捨て、パイロットスーツ姿に変化する。

「トレース・オン！」

シロウは戦闘用の夫婦剣、『干将・莫邪』を投影する。

「どけえええええっ！」

双剣で、ゴーレム達を蹴散らして行く。

「ガンド・バスター！」

リンは魔力を增幅する銃を使い、ガンドを撃つてゴーレムを撃退する。

一方、結界の外では、セイバーが応援に駆け付けようと奮闘していた。パイロットスーツ姿に変化して、戦闘用の剣『カリバーン』で結界を破ろうとしていた。

「くつ……駄目か？」

しかし、結界は容易には突破できなかつた。

次々とゴーレムを倒して、結界の基点を目指すシロウとリン。

そんな二人の行く手に、今度は葛木が立ちはだかつた。

「く……葛木貴様……」

「衛宮と遠坂……転入生のお前達が、マドウの戦士だつたとはな。」

「そう言う貴様は、セイドウの手先か？」

「セイドウ帝国……戦闘指揮官、クズキ将軍だ！」

葛木の体から、妖しい闇が溢れ出す。その闇は葛木の全身を覆い、深く暗い緑の甲冑となつてクズキ将軍を包み込んだ。

「先手必勝！」

リンは、ガンド・バスターでクズキを攻撃する。しかし、クズキは素早い動きで攻撃を悉く躱し、あつという間に間合いを詰めて來た。クズキの正拳が、リンを襲う。「リン！ 危ないっ！」

とっさにシロウが間に入り、干渉・莫多でクズキの拳を弾く。

「し……シロウ！」

「リン！ここは任せろ！お前は、結界を解くんだ！」

「分かつたわっ！」

クズキはシロウに任せ、リンは結界の基点に急ぐ。

ようやく一階に辿り着き、基点の化学室に飛び込む。

「?!」

リンの目に映ったのは、およそ正気とは思えない形相で、結界発生装置を握り締め笑っている間桐慎二の姿だった。

「何をやつているの？貴方！……止めなさい！直ぐに結界を解くのよ！」

リンは、慎二に飛び掛かっていく。

「な……何だお前は？邪魔するな！僕を馬鹿にした奴らを、皆殺しにしてやるんだから……」

縛れ合う二人。だが、慎二は頑として装置を渡さない。

「ごめん！」

仕方無く、リンは慎二の鳩尾に一撃を入れる。

「うぐっ！」

慎二は崩れ落ち、リンは慎二から結界発生装置を奪い取る。即座にそれを壁に投げ付け、ガンド・スターで破壊した。

装置が破壊されたため、結界は消え、辺りは元の空間に戻る。

そんな中、校庭ではシロウとクズキの戦いが続いていた。二人は、戦いの流れで廊下から校庭に飛び出して来ていた。

「むんつ！」

クズキの正拳に、シロウの剣が碎かれてしまう。

「しまった！」

その一瞬の隙を、クズキは見逃さない。蛇のようにしなる右腕が、シロウの首を厳しく掴む。

「うぐっ！」

クズキは、そのままシロウを吊り上げてしまう。

「ぐうあああああああっ！」

苦しむシロウ。絶体絶命というその時……

「シロウ！」

セイバーが、クズキに斬り掛かつて來た。

クズキは、シロウをセイバーに投げ付けて後退する。セイバーは、とっさにシロウを

受け止める。

「大丈夫ですか？シロウ！」

「あ……ああ……助かった、セイバー……」

クズキは、何かの指示を出すように右手を上げる。すると、校庭のあちこちから、無数の骨ゴーレムが湧き出して来る。

「シロウ、戦えますか？」

「当然だ！全部蹴散らすぞ！」

シロウは、再び干渉・莫耶を投影してゴーレムを迎え撃つ。セイバーと二人で戦うが、如何せん数が多い。そこに……

「ガンド・バスター！」

リンも応援に駆け付ける。これにより、シロウ達の方が圧し気味になつていく。

「ランスロット！」

これを見た、クズキが叫ぶ。

その直後、凄まじい稲光が校庭に落ちる。激しい爆煙が吹き上がり、その中から英靈獣ランスロットが現れた。

「グゥアアアアアアアアアアッ！」

今度は、シロウがセイバーに向かつて叫ぶ。

「セイバー！ 黒化だ！」

「はいっ！」

ランンスロットが、セイバーに向けてオーラを放つ。それは、無数の矢に形を変え、雨のようにセイバーに降り注いだ。

「黒化！！」

直後、セイバーが立っていた場所は大爆発を起こす。が、その爆炎の中からひとつのかくろみの黒い球体が飛び出す。

それは周りに居る骨ゴーレム達を悉く弾き飛ばし、校舎の屋上まで登つて行く。そしてそこで、一人の騎士に姿を変える。

重厚な黒い鎧に身を包み、黒いバイザーで目を覆い、風王結界を施した不可視の剣を持つブロンドの髪の女騎士に。

「聖杯騎士！ セイバー！」

その騎士は、見上げるクズキ達に向かつて名乗りを上げる。

聖杯騎士セイバーは、僅か一ミリ秒で黒化装着を完了する。

では、黒化プロセスをもう一度見てみよう。

『黒化!!』

ヘラクレスの心臓部の、小聖杯イリヤスフィールの魔術回路が、セイバーの精神とシ

ンクロしてスパークする。

だ。增幅された超魔力は、黒いオルタアーマーに変換され、セイバーに黒化装着されるの

一はああああああー！

セイバーは、再び黒い球体となつて校舎の屋上から、骨ゴーレムの大群の中に舞い降りる。

抹殺！

クズキの指令で、ゴーレム達は一斉にセイバーに襲い掛かる。セイバーは、見えない剣で次々とゴーレムを薙ぎ払っていく。

「グウアアアアアアアアアアアアツ!!」

ランスロットもセイバーに襲い掛かる。

激しい剣戟が交わされるが、セイバーの方がランスロットを圧倒していた。

戦況を見詰めるキレイが叫ぶ。

「セイドウ界に引き込むのだ！」

キレイの指令に、メディアは水晶玉に念を込める。

「セイドウ界……発生！」

そこに、アンリマユの巨像から再び闇が放たれ、水晶玉は激しく輝く。

突如、穂群原学園上空を暗雲が包み込む。更にセイバーの目の前に巨大な時空の歪が発生し、英靈獣や骨ゴーレム達諸共、その時空の歪の中に吸い込まれていく。

「ベルレホーク！」

セイバーの叫びに呼応して、ヘラクレスから一台のマシンが発進する。それはすかさずセイバーの元に駆け付け、セイバーはベルレホークに跨ってセイドウ界に突入する。セイドウ界とは、一種の固有結界である。

アンリマユの強大な魔力によつて作られたこの空間の中では、英靈獣は通常の四倍の戦闘力を発揮できるのだ。

「ベルレホーク・レーザー！」

セイバーは、ベルレホークに装備されたレーザーで骨ゴーレムを一掃する。

更には、ランスロットにもダメージを与える。

「グゥアアアアアアアアアアッ！！」

ランスロットは、両手を広げて天に翳す。

すると、暗雲に包まれた空から、闇の触手に憑りつかれた三機の戦闘機が現れる。

戦闘機はミサイルを放ち、ベルレホークを攻撃する。

無数の爆炎が立ち昇り、ベルレホークごとセイバーも吹き飛ばされてしまう。

しかし、セイバーは空中で体勢を立て直して着地し、自分も天に向かつて叫ぶ。

「ヘラクレス！」

セイバーの叫びに呼応して、今度は超次元戦闘母艦ヘラクレスが、その名の如く次元の壁を越えてセイドウ界に現れる。

「バーサーカー・フォーメーション！」

その言葉で、ヘラクレスは変形を始める。戦闘母艦は、見る見る内に巨大ロボット体型に変わっていく。

「ヘラクレス・アタック！」

飛んで来る戦闘機を、その巨大な腕が打ち落す。

「ヘラクレス・カノン！」

更に、口から強力な光線を発射し、残った戦闘機群を全て撃ち落した。

残るはランスロットだけだ。

再び、セイバーとランスロットの激しい剣戟が展開する。

そして、遂にセイバーは奥の手を出す。

「エクス……カリバアアアアアツ！」

風王結界が解け、黄金に輝く聖剣がその姿を現す。

「はあああああああああつ！」

拮抗していた剣戟は、途端にセイバーが圧倒し始める。

ランスロットに聖剣の斬撃が何発も炸裂し、その度に激しい火花が飛ぶ。

最後に、セイバーは聖剣を上段に振りかぶつて、必殺の一撃を放つ。

「セイバアアアッ！クラアアアアッシユ!!」

「ギイエエエエエエエエッ！」

斬撃はランスロットを真つ二つに斬り裂き、激しい爆発を引き起こしてランスロットを噴き飛ばした。

ランスロットの消滅と共に、セイドウ界も消え去り、誰も居ない校庭に颯爽と聖剣を構えるセイバーの姿が戻った。

学園を襲つた結界は消え、クズキも退却した。

穂群原学園には救急隊員が駆け付け、衰弱した生徒や教師達を病院に運んでいる。

学園から少し離れたところで、セイバー達はその様子を見守つていた。

リンが、確認した状況を説明する。

「程度の酷い人でも、三日も安静にすれば回復するそうよ。」

「結界を発動させてしまった生徒は？」

「半ば洗脳状態になつていたみたいだけど、もう正気に戻つたわ。これから、ちょっと心

のケアが必要かもしれないけど……」「まずは、一件落着ですね。」

最後にそうまとめるセイバーを見て、シロウは悪戯っぽく言う。

「さて、一仕事終えて、さぞお腹が空いただろうセイバー？」

「な……何を言い出すのですか？ シロウ！ 私は別に……」

そう言いかけた途中、セイバーのお腹がいきなり大きな悲鳴を上げた。

「……っ？」

思わず、セイバーは赤面して俯いてしまう。

「ふふつ、お腹は正直ね？」

「良し、じやあ今夜は腕によりを掛けて、御馳走を用意するか？」

「オッケー！ 早速買い出しに行きましょう！」

そう言つて、シロウとリンは駆け出して行く。

「あ……待つて下さい！ シロウ！ リン！」

セイバーも慌てて二人の後を追う。

セイバー達の活躍で、穂群原学園には平和が戻った。

だが、セイドウの暗躍はまだ始まつたばかりだ。

これからも頼むぞ！ シロウ！ リン！

黒化せよ！聖杯騎士セイバー！！